

郡山市湖南町の沿革

湖南町は郡山市の20%にも及ぶ面積が猪苗代湖南岸に広がり、肥沃な壤土、自然の恵み、湖南を囲む山々の豊富な資源が縄文時代から5000年以上の歴史を刻んできた。

また、豊かな心情、自然環境などによって特異な文化が生まれ保存されてきた一方、会津の入口、通り道として歴史上、何度となく戦乱や政治の犠牲になった。

農耕時代になり西暦135年、阿尺国造が福良の里を開墾、また前後して南方民族の宗像一族が九州より移住し開拓し、その影響を受けてきた。

古代から中世になり武家の政治に変わり源頼朝の臣、伊東が安積を治め健保元年（1213）には湖南に分派、横沢城を築き湖南、湊6200石を支配した。

その後芦名の支配下となり伊達正宗に攻略される天正17年（1589）まで376年間続いた。

豊臣時代になって天正18年（1590）蒲生氏郷、文禄4年（1595）蒲生秀行、慶長3年（1598）上杉景勝。徳川時代になり慶長6年（1601）蒲生秀行、慶長17年（1612）蒲生忠郷、寛永4年（1627）加藤嘉明、寛永8年（1631）加藤明成と替わり、寛永20年（1643）保科正之が会津の領主となったが23万石に減らされたためその影響で湖南は二分され、舟津、館、横沢、浜路、安佐野の山之内五箇郷といわれる五ヶ村が二本松藩に所属替えとなり、以後、190年間続き天保4年（1833）山之内五箇郷は会津藩預かりの天領となり、元治元年（1864）松平容保の京都守護職の役料による加増によって再び会津領となったが4年後、明治維新となる。

湖南は長い政治による分断によって、ことばや生活習慣などに影響を受けた。

明治維新後は、若松民政局の管轄（明治元年10年）となり、明治2年若松県となり、四条某知事藩として旧来の施設を続行しその局に当てられていた。

すなわち、福良組郷頭所を設けて二人の役人を置きこの地域を治めさせた。その範囲は舟津、館、横沢、浜路、安佐野、中野、三代、福良、馬入新田、浜坪、赤津の11ヶ村であったという。明治4年これを廃し区会所政治となり、大区を若松に置き四大区といった。更に、小区を福良村、舟津村の二ヶ所に設けこの地一帯の政治に当たらせ、新政府の方針の徹底を計ったものである。明治9年大区、小区の制度を廃し（若松県）一様に福島県の管轄としたが、同12年3月郡区改正に初めて本部（安積郡）全体をもって行政区割と定められ安積郡役所の所管に変わった。

明治22年4月町村制実施によって福良、赤津二ヶ村は行政組合として役場を福良に置き、更に25年6月三代を併せて三ヶ村行政組合が成立。30年10月それが解除され、各村自治体として出発することになり、独立村として政治がとられるようになった。

22年当時中野、三代が合村して箕輪村と称し、役場は三代にあったが26年6月分離して、三代は福良、赤津と合し、中野は月形と合して二ヶ村行政組合となったが、これも41年4月に解除されて中野、月形各村が誕生した。

昭和28年4月町村合併促進法の施行により、同一環境の赤津、福良、三代、中野、月形の五ヶ村が合併して、昭和30年3月31日に湖南村として発足した。

中野に本庁、福良に支所、三代と舟津それに赤津に出張所をおいた。32年1月1日新庁舎が落成したので、改めて本庁を福良に移し、舟津に舟津支所を新設、三代と赤津の出張所を廃止した。38年7月12日郡山新産業都市の発足に伴い関係者の絶えざる努力と村民の協力により、郡山市、安積郡全町村、田村村（中田、西田両村同年8月編入合併）が大同合併、新郡山市が誕生。40年4月30日限りで湖南村が発展的解消を告げ「郡山市湖南町」となった。

湖南町は郡山市内とは申せ、陸の孤島であった故に地域振興、活性化が叫ばれている中地域住民の長年の願いだった三森峠のトンネルが昭和61年に着工され平成4年に開通、郡山市街地へは約20分の時間が短縮され、なお一層の地域の発展を促すこととなった。

また、国道294号線（長沼町、白河市に通ずる）勢至堂峠のトンネルも昭和63年に着工、平成6年に竣工。国道294号線（会津若松市街地に通ずる）黒森峠のトンネルも平成11年に着工、15年秋に開通した。

これらによって、陸の孤島は一挙に解消され、会津の文化、県南の文化、経済が身近になり更なる地域振興に弾みがつくこととなった。

以降、次のように開発が進められている。平成17年12月、多田野トンネルが開通。平成19年2月、平成17年に着工した国内最大出力の布引高原風力発電所が稼動。平成21年福良バイパス着工。

令和3年11月、県道6号郡山湖南線の休石1号橋、逢瀬第1トンネル、休石2号橋、逢瀬第2トンネル、休石3号橋が開通。郡山三森峠道路整備完了。